

文化芸術による復興推進員（福島県）

第1回連絡会議 要旨

日時：11月28日（水曜日）
13:30～16:00

場所：郡山市 貸会議室ギャラリー虎丸町 会議室C

出席者

（福島県推進員） 岩崎 道弘（福島県文化センター）
川延 安直（福島県立博物館）
菊池 信太郎（郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト）
西 道典（南相馬市小中学校PTA連絡協議会）
松崎 和則（福島県文化スポーツ局）
（助言者） 渡辺一雄（文化芸術による復興推進コンソーシアム）
（運営委員） 小松弥生（全国美術館会議）
松本辰明（（社）全国公立文化施設協会）・本杉省三（日本大学）
渡辺聡（（一社）日本音楽著作権協会）
（文化庁） 矢田文雄・土屋啓一（文化庁文化活動振興室）
（事務局） 大和滋・松野幹夫（文化芸術による復興推進コンソーシアム）

開会の挨拶

1. 出席者紹介
2. 文化芸術による復興推進員について
資料の確認

松本

- ・コンソーシアムは、昨年10月から調査研究や、立ち上げの準備を行い、今年5月に運営委員会を立ち上げた。また、情報サイトを立ち上げて、本格的な活動を開始したところである。
- ・現地の声や課題等を的確に受け止めながら、具体的な復興推進活動につなげていくことがコンソーシアムの重要なミッション（課題）である。推進員の皆さんには、今後も継続的に意見交換や情報提供等を行っていただき、現地の役に立つ取り組みが、一緒に担えればと思っている。
- ・福島県は放射線という問題がある中で、今後の復興推進に向けてどう取り組むのかが大きな課題であると思う。本日の会議では、忌憚のないご意見をいただければと思う。
- ・配布資料の説明と各自己紹介（省略）

3. 復興推進員報告

大和

- ・今日は、これまで復興に関わってきた立場から課題等をご報告いただき、意見交換を行いたい。

菊池

- ・私がコンソーシアムと関わったのは、昨年度の調査研究の報告書で「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト」について、原稿を書いたことがきっかけである。文化芸術というこ

とで、最初は、私がやっているテーマと違うと考えた。しかし、「児童憲章」には、子どもにとって適切な文化財と遊び場を用意するという権利が含まれている。そのような見地から子どもの環境をつくるのが大事であると考え依頼を受けた。

- ・私は、去年の3月から、郡山市の行政、教育委員会、郡山医師会と共に、子どもたちの心のトラウマ（PTSD）の予防を図るための活動をしている。その中で、絵本の読み聞かせを扱っている。絵本の世界には、人生経験の示唆をしてくれる様々なエピソードが含まれている。また、大人が子どもに絵本を読むことによって、大人は子ども達の世界に容易に入り込むことが出来る。災害の後、また、様々なストレスを抱える子どもたちにとって絵本の読み聞かせは、大きな心の支えとなる。他には、心のケアということで、専門の先生方を招き、講習会やワークショップを行っている。また、小児科医として、体と心の健康についての講演も行っている。
- ・震災直後、福島の中通りでは屋外で生活が出来ず、子どもたちは屋内で生活していた。そのため子どもたちの運動不足が進行している。何とか体を元気に動かしてほしいと、屋内での運動を指南する先生を呼んで、子どもたちの居場所、遊び場の確保を行った。去年の夏、市内の施設を借りて、大型遊具を持ち込み、子どもたちを3日間遊ばせる事業を行った。そのイベントがきっかけとなり、ヨークベニマルというスーパーからも支援をいただき、「PEP Kids Koriyama（ペップキッズこおりやま）」という東北最大級の屋内遊び場をつくった。
- ・屋外での活動は、依然として厳しい状態が続いている。幼稚園や保育園では、半数以上の幼稚園や保育園は、いまだに外での活動が出来ない状況である。この状況は、子どもにとって成長過程の有意義な時間が侵されており将来どう影響するのか心配である。また、行政各課には、なかなかその危機感が伝わっておらず、その辺りも非常に大きな問題である。
- ・企業などから子どもに対する復興への支援ももっと期待したい。
- ・避難した方と現地に残った人の交流や情報交換が少なく、意思疎通ができていない。また、同じ郡山市に住んでいても、住民票が別の市町村にあると連絡が来ないといったことがあるので自治体同士の連携を期待したい。
- ・郡山市は、“楽都郡山”をテーマに音楽活動を一生懸命に行っている。しかし、コンクール優勝などを目標に練習をやりすぎてしまうと、優勝後が続かないといった弊害もあるためスポーツや芸術を行う楽しみを普及する活動も必要だと感じている。
- ・「郡山市震災後子どもの心のケアプロジェクト」は、市の外郭団体として事業を行っており、より子どもに適したことをやろうとNPOを今年の5月に立ち上げた。それが「NPO法人 郡山ペップ子育てネットワーク」である。読み聞かせや、子育てにおける遊びの伝承、子どもたちが運動できる環境づくりをサポートしている。ぜひ皆さんからもご支援をいただければと思う。

大和

- ・様々な問題がある中で子どもたちをどう育てていくかをテーマに質問はあるか。

西

- ・南相馬でも屋内の施設が民家の狭い所にやっと出来た。今度は、外で子ども達を遊ばせることができないかとみんな共和国というNPOが屋外の遊び場をつくったが、郡山では、屋外で子ども達を遊ばせる施設は、考えていないのか。

菊池

- ・この屋内の施設を作った時に、外の環境は危険なのではないかということをおざらげアピールしているような施設であるというような様々な批判もあり、子どもたちが遊ばなくてはいけないということに対する認識が、本当に低い気がした。そこで、遊ぶ環境をあえてつくって見せたかったというのがあった。また、小さな子どもを対象に考えていたため、去年の夏の時点では、屋外での企画は通らないだろうと屋内での施設となった。今は、屋外の大きな公園を新しく作り直してほしいと思っている。体を動かすような遊具を置いて、子どもや親たちも安心して、自然と遊べるような場所を作り直してもらうことが望ましいが、現実的には難しい。

渡辺（一）

- ・私はコンソーシアムとは別に、去年の6月からNHKのモニターを引き受けている。新潟市と長岡市を担当しており郡山から母子避難してきている何家族かをフォローしている。小学生の子どもを持つ母親が、新潟市内でも子どもを外へ出すことを躊躇うほどダメージを受けていて、その状況は、今も変わっていない。ご主人は郡山で働いているため、家族間の葛藤でも非常に悩んでいる。専門医として、そういったご家族が、早く郡山に帰れるように何か将来を見通す助言のようなものがあれば頂きたい。

菊池

- ・福島県でも除染対策が進んでいるが、放射線に対する不安感は、未だに千差万別である。
- ・放射線は危ない、被ばくしてはいけないという視点のみで議論してしまうと、子どもの成長と発達に一体何が必要なのかという議論にはならない。除染という放射線を薄くしたというイメージではなく、全く新しく作り直したというイメージが大事である。

渡辺（一）

- ・新潟で校医をしている方に、放射線に対しての行政区画を超えた共通の認識や考え方について伺ったが、全くないのが現状であった。放射線の問題については学校医の方は触りたくないというような、感じが見受けられた。放射線に対する医師としての共通の認識というのは必要ではないかと思う。

菊池

- ・福島県内では、何十回も放射線に関するセミナーや講演会を行っており、多くの情報が入ってくる。多くの情報の中から、県内の住民は、平均値をとって、こういうものだろうと、ある程度理解している。ところが、一步県外へ出ると、そういった情報は、全くない。福島に住んでいる方々と、県外の方々の情報の差は大きく違う。こちらから、発信している部分はあるが、届きにくい問題もある。医師の責任としてお願いしているのは、小児科の先生がまず放射線に対しての対応をきちんと理解をすることである。例えば、私も学会へ行くと「こういう質問には、どう答えたら良いか」と質問をされることがある。医師である以上、医師の責任のもとしっかりと説明を行い、少しでも市民を安心させる義務がある。

渡辺（一）

- ・子どもの権利という観点から、文化芸術による支援として強化してほしいことをご助言いただきたい。

菊池

- ・子どもは、まずは、健康な体・心が育ってはじめて文化芸術に触れることが出来るのではないか。今は、その段階までいっていない。子どもが本来やるべき経験をしていない状況やその影響をぜひ指摘してほしい。子どもが文化芸術に触れて育つ環境にないということへの指摘が、子ども達を守らなければいけないメッセージに変わっていくのではないかと思う。

大和

- ・この点は、文部科学省の教育部分の対応もあると思う。文化庁の方から、ぜひ文部科学省に伝えていただき、コンソーシアムからも発信していくことが出来ればと思う。

川延

- ・我々のところでも、アートスクールを昨年から進めている。これは、中通りの子どもたちに比較的線量の低い所で遊んでもらえる機会を提供したい趣旨で始めた。参加される方のお考え次第という理由から、具体的な線量の高低を、一切文言に入れないことに気を付けた。先生の NPO 等と一緒に我々も企画をお受けできないかとお話を聞いて思った。郡山の状況等を情報交換しながら、今後共助出来ればと思う。

本杉

- ・子どもと共に親も様々な問題を抱えていると思うが、大人の心の問題に対して、何か連携をしているのか。

菊池

- ・ご指摘のように、子どもの生活を決めるのは親である以上、保護者は子どもにとって大きな存在である。今年から、親のケアも視野に入れたプロジェクトを行っている。例えば、読み聞かせの活動などは、積極的に親に入ってもらい、一緒に参加することを呼びかけている。子どもを対象とした遊びの活動にも、親子で参加し楽しんでもらう企画を入れている。
- ・また、臨床心理士を遊び場に配置して何かあったらすぐ相談できるような環境も整えつつある。

小松

- ・活動の中で保護者間のネットワークは出来てきているのか。

菊池

- ・今回の震災は、母親のコミュニティが壊れてしまった問題がある。学校も幼稚園も人が減り、保護者同士のお友達がなくなってしまった。良い遊び場を作ることは母親のコミュニティも自然と出来ると考える。
- ・コミュニティの壊れた原因には、放射線に対する認識の違いも挙げられる。

渡辺（一）

- ・家庭の中でも母親対父親という関係で放射線に対する価値観の違いがあると思うが、そういうケースはどうか。

菊池

- ・今は、ある程度そこをクリアしている人たちが残っていると思うが、一時期は価値観の違う家庭も多かった。また、自作の農産物を孫には食べさせないといった、同じ家に住みながら、ご飯を分けている家庭もあった。

渡辺（聡）

- ・先ほど、芸術活動を頑張りすぎてしまうという話があったが、継続的に活動出来る支援体制

には、どのようなことが必要だと考えるか。

菊池

- ・コンクールで優勝することが大事になっているように見受けられる場合がある。県内には歴代の金賞やトップをとる学校があり、大会前に診療所を訪れる生徒の中には、苦しそうな子もいる。スポーツでも同じことが言えるが、文化芸術活動は、本来楽しみの上にあるべきだと、私は思う。再び苦しmitakくないといった思いから、活動を止めてしまう中学生などを見るともったいないと感じる。

渡辺（聡）

- ・震災との関係で、中高生が受けている心のストレス等はどうか。

菊池

- ・中高生には、おそらくストレスが大きな問題としてないと思うが、元々何か抱えていた生徒については、1つのきっかけとなる場合があると思う。

大和

- ・では次に、南相馬市の報告をお願いしたい。

西

- ・震災直後の南相馬市は全員避難で、4月22日に学校が再開した。しかし、子どもたちは、外のみでなく体育館も使用出来ない状況だった。私はPTAの会長をしている立場から、子ども達が自由に水遊び、土いじりができる環境を、早く整えてあげたかった。昨年、教育委員会とNPOが連携して南相馬市の子ども達1000人以上が北海道、沖縄に遊びに連れて行く企画があった。他にも落語芸術協会や劇団四季の協力のもと、様々な芸能に子どもたちを触れさせることが出来た。
- ・南相馬市原町区にある原発20～30キロ圏内の学校は、今年の3月に何とか自校で卒業式を挙げたいと戻ってきた。10～20キロ圏内の南相馬市小高区は、今年の5月からまちへの立ち入りが可能となった。しかし、津波の時のまま、車が田んぼの中にあるような状況で、環境的な問題でさえ、まだ解決できていない。
- ・子ども達の心のケアの課題もある。狭い仮設住宅の中で、東電が悪いとか誰々のせいだと親が言うために、子どもたちが落ち着かない地域もある。中学校では、他の地区で対人関係が上手く作れずに戻ってきた生徒も多くいる。
- ・コンソーシアムには、南相馬市にある文化振興事業団「ゆめはっと」などと共助の可能性を探ってほしい。また私は「NPO 法人南相馬こどものつばさ」の理事長もしており、親子料理教室開催や芸術団体に声をかけ、本物を子供たちに見てもらい感激と元気づける地元受け入れ活動もしている。支援希望団体などあれば仲介などもしてほしい。

川延

- ・私は、県の文化施設職員という立場から県の事業や助成事業の活動をしている。「会津・漆の芸術祭」という県主催の事業は、多くのアーティストが福島に来ていただく窓口として有効に機能した。
- ・福島県と東京都の共催「福島芸術計画×ART Support Tohoku-Tokyo」では、「週末アトスクール」をはじめ、南相馬の中央図書館と連携しながら活動をしている。南相馬では、「南相馬の宿」と「アート・ママと話そう」という2つの企画を行っている。

- ・今年から文化芸術振興費補助金にエントリーして、「文化遺産を生かした観光振興・地域活性化事業」を行っている。「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」と銘打ち、主に南相馬、福島、喜多方で事業を展開している。その事業の1つ「隔たり／連なり」は、福島の事を熱心に発信しているアーティスト3名の作品を通じ現地の人の声がそこに反映されることを意図した企画である。
- ・現在の問題は資金体制である。まだ、事業費を頂けていない文化庁には、早めの支払いをお願いしたい。「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業」についても2分の1支援では、活動が困難であり、立替えをお願いできる場や対策を練れる場が出来ることが望ましい。
- ・単年度事業の弊害という問題もある。内容に継続性が持てれば、非常に効果的な支援が出来る。継続的な活動が出来るための、資金体制も工夫が必要である。
- ・50代の男性は、仮設住宅からあまり出てこないために、活動に参加してもらう仕掛けを考える必要がある。
- ・東京都の支援事業は人とお金の両方の支援があるため、順調に進んでいると感じる。
- ・企業との連携も難しい課題であり、もっと人同士のつながりが出来る体制作りがあると良い。
- ・文化施設間も連携がなされていない。
- ・どんなスキルを持つ人がいて、どのような支援が出来るところがあるのか情報を知りたい。その方たちと、どんな活動が出来るのか、情報の整理とサポートをコンソーシアムに期待したい。

岩崎

- ・会館が1年半休館状態となり、子どもたちが本物の芸術に触れる機会が減ったため、それがいかに大事かという認識を新たにした。同県内の施設として南相馬の「ゆめはっと」とは、連携していきたいと思っている。

大和

- ・福島県立博物館と福島県文化センターの連携はあるのか。

川延

- ・文化センターの中に歴史資料館を併設しており、そこの連携はある。しかし、文化センターとは出来ていない。

岩崎

- ・私ども福島県文化センターは、大ホールの天井4分の1が落下し避難所にもなれないほど大きな被害を受けた。そのような中で、初めに行った支援活動は、4月頃劇場にあった映像機器、音響機器を持ち出し、子どもがいる避難所での映画上映会であった。その後、文化庁の「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」で実行委員会を担った。昨年9月から今年の2月まで保育園、小中高校の139カ所にアーティストを派遣する活動を行った。
- ・9月29日に568日ぶりに会館が再開したので、県内の民俗芸能や伝統芸能の継承に貢献できるような事業を今後は展開していきたい。
- ・文化庁の「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」については、今年も96カ所での公演を実施中である。被災地支援ということで岩手県・宮城県・福島県に特別枠が設けられている。福島県は他県と復興の状況が異なることもあり、特に福島の子どものための事業を考慮いただけるとありがたい。

4. 報告された課題についての協議

5. 課題の整理とコンソーシアムの今後の方向について

※この2つは、同時に協議された。

大和

- ・文化庁から新しいスキームの説明も含めて支援のあり方についてご意見をお願いしたい。

矢田

- ・「地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ」についての説明。(内容省略)。2分の1助成では活動しにくいというご意見は、他県の会議でも伺っているが活用していただければと思う。
- ・文化芸術振興費補助金の概算払いが遅れていることについては、財源手当ができない状況が続いており、非常に御迷惑をかけている。当庁の事業担当へ状況を伝えておく。
- ・「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」については、予算を切り分けて福島対応として切り出して活動することが望ましいということか。

岩崎

- ・昨年に比べ今年度は、金額が減ってしまった。もう少し考慮していただきたい。
- ・また、事務作業が膨大になる点と実施が2学期からとなる点については、県の指定団体制度を設け、実施団体として受けることが出来れば、事務量も軽減され、早い時期に実施も可能であるため提案したい。

矢田

- ・事務的に配慮できるのであれば、もう少し工夫をしてみたいと思う。

大和

- ・福島県は色々と提起いただいているように、コミュニティが分断されているところが他県と違う。文化芸術の役割としてコミュニティの再生を含めて県から報告いただきたい。

松崎

- ・福島県は、震災前203万人だった人口が、今現在、196万人となり6万人の方々が県外に避難されている。さらに、196万人の人口のうち、16万人の県民が避難生活を余儀なくされている。県としても今年度は、復興元年と位置づけて様々な政策を行っている。
- ・私ども文化スポーツ局は、文化やスポーツを通じて、県民に少しでも明るい話題を提供していくことを目的に活動を進めている。
- ・お手元にお配りしたチラシ「ふるさとの祭り2012」では、地域に古くから伝わる民俗芸能や伝統芸能を郡山と会津若松市に集結して、福島県の元気な姿を披露しようという思いから開催した。全国から68団体、県内から54団体の方々にご出演いただくことが出来た。
- ・民俗芸能は震災前から過疎化・高齢化の進展に伴って後継者が育たないというような課題があった。さらに震災後、原子力災害に伴い避難生活を余儀なくされている団体があり、このイベントを通して、人と人とのきずなやふるさとのきずなを再認識したり、復旧・復興に向かう県民に感動と勇気を与え、ふるさとふくしまの真の姿を全国に発信したいという思いから実施した。文化庁のイニシアチブ事業についても実施したいと考えている。

渡辺(一)

- ・福島県の復興については、県の問題のみならず、復興庁をはじめ復興計画の策定から実施、予算等々、大きな流れの中で行われるべきである。コンソーシアムの調査研究でも、全体としての大きな復興推進の流れの中に、文化芸術をどう位置づけるのかをフォーカスしたいと考えている。しかし、福島県については、文化振興以前の問題もある。そこで、南相馬と福島県のお二人に、まずは総括的な将来の見通し、コミュニティと文化をどのように考えていて、どういう切り口で整理しようと考えているのかお聞きしたい。

西

- ・私は本業で宮司をしており、祭りについての問題意識を持っている。高齢化など元々、祭を継承しにくい状況で震災が起これ、獅子頭は残ったが、コミュニティがばらばらになってしまった。
- ・例えば各中学校に地域の伝統を継承するクラブを作ったり、相馬農業高校では、複数の伝統芸能の継承活動をしているが、南相馬地方全部の伝統芸能を継承するのは無理である。震災前は、何とか記録を残す為に博物館でビデオ収録を行っていたが伝統芸能の継承活動は学校などを使ってなんとか復活させたい。
- ・一歩踏み出す人、一歩踏み出しそうな人を地域で見つけて援助する。そういう方法があればよいと思う。「ふるさとの祭り 2012」に出られた団体は、中心になる人がいて柱となり、引っ張っていった地域である。まず、頭となる人を育て、または探し継承する手段を見つけることが必要だ。

松崎

- ・総合的な学習の時間が削られている中で、学校が後継者を育成することは、難しい。やはり、地域のリーダーとなる方が手を挙げて、活動していかないと、継承は難しい。

渡辺（一）

- ・人を探すという事は1つの方法論である。そして、何のために祭をやるのかというところまで考えていく必要がある。県としても日常的に問題意識として押さえているという認識でよいのか。南相馬についても、一部の人のみでなく、そういう問題が共有されているということか。
- ・避難先で復活した祭が地域の祭りを継承していくという事例は過去にもある。そのような事例は、当事者から聞くことなしに語ることは出来ないので、述べてほしい。

西

- ・個人的には文化の継承を優先するべきであると考えている。古来、戦に勝って、その地区を奪い取り、神社も奪い取るという事例はあった。その地区の拠り所である神様をお祭りすることにより、地域も臣下とした。また、武士が自分の氏神を奪い取った地域の信仰として流布する例もあった。
- ・別な場所で、新たな文化として継承されることはすごく大事なことであると思う。文化とは、生きる事と通じる部分もあるが、変化してもよい、繋いでいくものなのだと自分は考える。

大和

- ・神社本庁が神社震災の問題で何か活動を始めたようだが、報告してもらえないか。

注) 神社本庁では、長期的且つ継続的な復旧・復興の支援活動を実施すべく、平成24年6月に「原子力災害に係る神社支援基金に関する規程」を制定した。この規程は、放射線被ばくに

伴う除染の経費負担を必要とする、若しくは神社施設への立入りが禁止又は制限されている神社に係る復旧・復興の活動に対して、支援金（上限や制限が有り）を交付するものである。（神社本庁 HP より）

西

- ・神社本庁が福島の復興を取り上げ始めた。ただ、国からも県からもはっきりした放射能被災地に関する除染復興指針は出ていないため（特に宗教施設に関して）、福島県神社庁としては義援金等配布半ばである。私としては、スピードの遅さもあり、あまり期待していない。

大和

- ・避難している方がいる地域の立場として、意見はないか。

川延

- ・伝統芸能とは全く関係ないお祭りの事例で、仮設で細切れになってしまったところに大学生が乗り込んできて芋煮会のようなことを行い新たなコミュニティが出来た。
- ・「はま・なか・あいづのプロジェクト」で神楽を復興させる企画を行った。アーティストに入ってもらい、神楽を格好よく見せる活動をした。これは、伝統を守る保存会とは対立してしまうため、すり合わせが非常に難しかった。具体的には神楽の頭が重いため、他の素材で格好よく作ろうとした。それは、伝統芸能を保存するというよりは、コミュニティをくっつけておく1つの手段として行ったと考えている。

渡辺（一）

- ・少し、飛躍するが、「仮の町」構想という仮説があり、仮に新たなまちを将来的につくる合意が出来た場合、各地域の伝統芸能、宗教行事が基となり新たなものをつくり出していく方向性に違和感ほどのくらいあるのか。

西

- ・私はいいと思う。震災前の原町区のある行政区では、自分の行政区には神楽がないと若者が集まって鹿島区の神楽をならい、新たに神楽を通したコミュニティができたという例がある。最終的に何のためにやるのかという、神様に奉納するという目的を見つけ出してくれば良いと思う。

松崎

- ・川俣町の山木屋地区という放射線量の高い地域に山木屋太鼓という獅子舞の要素を取り入れた創作太鼓がある。外からの要素が入った民俗芸能は、これまで各地にあった。

大和

- ・岩手県や宮城県の沿岸部でも担い手がなくなる状況の中で、他の地域に習いに行き、自分の地域でまた復興するという状況はあるようだ。新たに作るものには体系があると思うが、「仮の町」ではないとしても、新たな文化づくりのための新たな政策のビジョンはあるか。

川延

- ・ご意見を拝借したい案件がある。「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」の1つに、二本松の安達ヶ原を素材に、現代舞踊や演劇を製作し、東京で上演しようという企画がある。福島県の各地域の神楽や田楽舞をベースに組み入れ、原発へのメッセージも考えている。発信元として福島大学と会津の風雅堂とゆめはつとで主催したいと考えている。今はノウハウがなく、助言やスキームを頂きたいと思っている。

- ・スタッフは地元の間人がやり、演じる人は、全国区と決めている。ご協力をお願いしたい方を絞り込んで、一流の技術を持った方が十分に表現できるバックアップ体制を福島でとりたい。

大和

- ・面白い話である。まずはプロデューサーなり裏方を固めなくてはならない。

本杉

- ・「ふるさとの祭り 2012」は、全国大会というので、毎年どこかで開催しているのか。

松崎

- ・地域伝統芸能活用センターが主催者の1つとなっており、各県持ち回りで開催している。昨年度は青森県、来年度は石川県で行う。20回の歴史があり、始まりの頃は市町村自治体開催が多かったが、近年は県レベルで受けている。

本杉

- ・被災された3県で協力して、このような催しを毎年何かを行うことは出来ないか。この催しは協賛にJRなども加わっており、広報が上手くいけば、多くの集客が望めると思う。

松崎

- ・全国大会を今年度開催したので、数年は県の単独事業として、規模を縮小し、継続して実施していければと思う。

本杉

- ・3県が集まれば、相当なお祭りができると思う。東北の伝統芸能をきっかけに、またその場所に人が集まってくれることが期待できる。

大和

- ・岩手県は単独で伝統芸能のお祭りを始めているのではないか。コンソーシアムとして繋げるという話に戻るが、先ほどの安達が原の具体的ニーズの相談に乗ることが可能であると思う。

本杉

- ・新しい文化と同時に、今ある文化を積極的に繋ぐことが出来ると、後継者の問題なども少しずつ何とかしようという人の広がりが出てくる気がする。1つの県単位では難しくても3県で持ち寄れば出来そうな気がする。JR等がポスターを作ってくれば、効果的である。

小松

- ・美術館の立場から、文化財レスキュー以外のアーティストや文化団体との連携活動に、とても感動した。先ほどの川延さんの安達が原のプロジェクトのようなものこそ、このコンソーシアムで何らかのコーディネートをするべきだ。
- ・様々な施設での上演に関しては、公文協がネットワークを駆使すれば可能になる。
- ・細かいところは芸団協と公文協に協力いただきたい。全国に上演してみたい劇場は、あると思う。このように新しい文化が創造されていくことは本当に必要なことである。

川延

- ・次年度で、幾つかのワークショップや、市民参加のフォーラムを行い、再来年度の本番を考えている。そのためのいろいろな資金の準備を考えないといけない。

小松

- ・劇場・音楽堂の支援は使えるか。

矢田

- ・文化公演への支援なので劇場とタッグを組んでもらえれば可能である。
- ・基本的には年間の劇場の活動を支援するというスキームになっている。また、審査が相当厳しくなっており、最後まで残るかどうかという問題もある。

渡辺（一）

- ・宮古、仙台と会議を行い、3 日目にして少し手がかりができた。私は個人的には、コンソーシアムとして、いい提案をしてもらったと思う。

本杉

- ・川延さんが考える施設間の効果的な連携とは、具体的にどういったスタイル（姿）なのか。美術館、ホール、図書館に限らず、そういう施設間ということか。

川延

- ・安達ヶ原がうまくいけば、文化施設のスタッフとのネットワークが出来る。今、考えているのは、例えば博物館で黒塚フォーラムをしつつ、隣の会館で演劇を上演する。大きなホールだった場合は、外にいて野外劇にする。持っている情報や道具を取り入れ、第三極じゃないが、様々な形での催しが出来ると思う。

本杉

- ・それは、普段から願っていたことで、ぜひ実現してほしい。

川延

- ・組織立ては出来ているので、誰が責任を持つのかという大問題がクリアできれば、実現できると思う。

大和

- ・自主製作をする劇場が出てきており、新潟がつくったものを神奈川でやるとか、神奈川でつくったものを豊橋でやるといったネットワークは出来つつある。ある規模の劇場が集まり共同事業をやり始めてかなり活性化しつつある。